

# 絆 求 め て

12月11日発行

文責 私学振興専門員 久保田学



## 秋季公開講座ご参加ありがとうございました

令和6年11月16日(土)、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構専務理事の加藤篤彦先生を講師にお迎えし、「秋季公開講座」を松本市勤労者福祉センターを会場に実施しました。テーマは、「これからの幼児教育の動向とインクルーシブ教育」で、「これからの幼児教育の動向」「学びの環境整備」「遊びの概念」「これからの教育に求められるもの」「インクルーシブ教育における保育者の役割」などについてお話いただきました。また、午後は、午前の講義を受けグループワークで、「保育で大事にしたいこと」「保育での悩み」など、日頃考えていることについて自分の思いを語り合いました。



### <研修要旨>

<林由美子先生(聖テレジア幼稚園)まとめより>

#### ○これからの幼児教育の動向

- ・「社会的に成功する3つの要素」認知(IQ)とやる気と根性や忍耐(意欲・根気・集中持続・実行機能・自己コントロールする力)。非認知的能力(社会情動的スキル・やる気と根性や忍耐)は、幼児期に芽芽する
- ・実行機能は、友だちと協力することで促され、目の前の欲求を我慢し、目標を達成できるようになる
- ・友だちとの協力が、幼児のやり抜く力を促進する。友だちと一緒にやるとおもしろい、友だちとの会話を通しその作品がさらに意味を持っていく

#### ○学びの環境整備

- ・例えば砂場、誰でも自分の意志で自由にアクセスでき、道具や水が遊びのためにデザインされている。遊びのために整備されているから砂遊びに集中できる

#### ○遊びの概念

- ・幼児期にふさわしい学びの方法を「遊び」と呼ぶ。余暇ではなく、遊びを通して学ぶということ

#### ○集団適応重視教育はもう時代遅れ。「させる教育」の弊害が表出している

- ・指示を待ちその通りに動くだけでなく、自分で考えて行動することができなければならない

#### ○これからの時代を生き抜くために必要なのは「課題を解決する力」

- ・(教師が親が)何を教えたかから、(子どもが)何を学んだか、何を学んでいるかをみていくこと

#### ○保育者の役割は、幼児にとっての安全な避難所(安心の基地)になること

- ・人にとって一番重要なのは「安心感」その安心感は「人とのつながりでしか得られない」

### <参加者のレポートより>

○どちらかと言うと制作活動に力を入れて伸ばそうとしている園なので、あそこまでの自由な外遊びはなかなかできないのが現状です。園庭はとても狭く、水は基本使えず、子ども達にとっても窮屈な思いをさせてしまっていると改めて反省しました。

○日々の保育では、集団適応重視になりがちですが、子どもの主体性、やる気を引き出すことが重要だと改めて感じました。主体性は教えられるものでなく、子どもの心に火をつける遊びの中で学ぶものだとなりました。遊びには答えがないのに、つい教えてしまっていた自分に気づかされました。

○子どもの姿を捉える上で、目で見える結果やできた事だけに目を向けるのではなく、子どもが自分でチャレンジしようと集中したり、より高いところを目指して試行錯誤したりしている姿、子どもの心の動きを見ていける保育者になれるよう、自分自身を磨いていきたいと思えます。

○午後のグループワークから、各園の方針もあり、環境設定や活動・あそびの持ち方を変えていくというのは簡単なことではないですが、子どもが主体的に遊ぶことを共通の方向性としてできることから試し、取り入れていく努力を心掛けたいと思いました。

さて、今回の研修ではインクルーシブ教育に関わる内容にあまりふれていただけませんでした。多くの先生方からは、インクルーシブ教育について更に詳しくお聞きしたかったとのご意見をいただきました。加藤先生には、今後の研修で講師をお引き受けいただきインクルーシブ教育にウェイトを置いたお話をお聞きできるように考えていきたいと思えます。ところで、皆さんは研修の中で加藤先生がご紹介してくださったご著書「みんなを幸せにするインクルーシブ教育」を読まれたでしょうか。私は研修前に購入し、読ませていただきました。ご著書には、研修でお話いただいた内容が、具体的な事例を交えて紹介されていました。今回研修を受けられた先生方にとって、研修での内容を振り返り、理解を深める上で非常に役に立つと思えます。また、研修を受けることができなかつた先生方にとってもインクルーシブ教育について考える上で参考になると思えます。下には、ご著書から「子どもの学びの「先回り」をしない」について紹介します。興味を持たれた方は、ぜひ続きをお読みください。

…日本では、大人が子どもに「先回り」をして、教えてしまうケースが多いからです。この点は幼稚園だけでなく、小学校の教育課程においても大きな課題だといえます。教科書に書かれてあることを覚えさせるべく、教師が「チョーク&トーク」で一方向的に説明し、テストによって定着度を測る。そうした営みの中で、多くの子どもが「受け身」になっています。昨今はその反省に立ち、幼稚園教育要領や学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」を通じて自立的な学習者を育てることが目指されていますが、状況が改善するには相応の時間がかかるでしょう。

幼稚園教育においても、大人が「先回り」をした結果、主体的な学びを阻害してしまうようなことが珍しくありません。例えば、通常クラスの子における制作の場面を考えてみます。ある子が、段ボールを使って動物のワニを作っていました。秋の園祭りに出す展示物の一つです。作業が順調に進んでいたのですが、ワニの口をつくる段階になって手が止まりました。手や足は、単純に段ボールをその形に切ってテープでつければ良いのですが、口をつくるとなると「上あご」と「下あご」を作って、開閉するようにしなくてはならないからです。大人であれば、どうしたら開閉可能な口をつくれるか、頭の中でイメージできます。でも、幼児の場合はまだ経験していないことなので、どうすれば開閉するようになるのかが分からずに、手が止まってしまったのです。

このように困った子どもを見たときに、大人はつい「こうすればいいんだよ」と答えを教えてしまいがちです。そうしてサポートすれば子どもはそれなりに喜びますし、大人への信頼が高まるようにも感じます。しかし、こうした「先回り」は子どもが成長する絶対のチャンスを奪ってしまうこととなります。

自分の力だけで解決できれば、それは確かな知識・技能となりますし、大きな達成感も得られます。そして、その達成感に次なるチャレンジへの意欲も生みます。そのため、本園では、子どもの取り組みに関心を寄せながら、じっくりと待ちます。どうしても解決の糸口が見えない場合は、正解を示すのではなく、ヒントらしきことをさりげなく示すようにしています。

「先回りをしない」といっても、放っておけば子どもは育つという単純な話ではありません。特にASD児の場合は、子どもの成長を引き出すためには、ちょうどよいさじ加減での支援が不可欠となります。例えば…

（「みんなを幸せにするインクルーシブ教育」 加藤篤彦 時事通信社 p97～99より引用）

加藤先生の文章に「先回りは子どもが成長する絶対のチャンスを奪ってしまう」という言葉があります。よく「ほめる教育」という言葉を耳にすることがありますが、「ほめるだけの教育」では新たなことにチャレンジする力は伸びないとの報告がされています。保育者に「ちょうどよいさじ加減」が求められる場面ですね。（専門員）